

第4回「泉大津市オリアム随筆賞」

【泉大津市長賞】

くまさんの毛布

東有可・泉大津市

物心がついたころにはすでに、くまさんの毛布は私のおふとんのところにあった。それは緑と白をベースとしたくすんだ色合いのもので、まんなかにとぼけた顔をしたくまさんが配置されていた。

私は、とてもおとなしい子どもだった。そのため、思ったことを口に出せなくてくやし
いおもい、さびしいおもいをするのがたくさんあった。

そんなときは、くまさんの毛布と、母の手をぎゅっと握った。体をもぞもぞと動かしている私に気付いて、母はいつも、手をそっと握ってくれた。でも疲れているのか、いつも先に寝てしまうのは母の方だった。

いつぼう父からは、こんなことを言われた。

「たとえ眠くなくても、目をつぶっていればいつの間にか寝ているから、とにかく目をつぶりなさい。もし眠れなかったとしても体を横にしているというだけで疲れはとれていくから大丈夫だ。」と。

当時の私は、そのことばに、

「それって、ごちゃごちゃ言わずに早く寝なさいってことでしょう。」

と突き放されたように聞こえた。父は普段、明るく陽気なひとなので余計にきつく感じた。

だが、この父の教えは効果てきめんで、半信半疑で毛布を抱きしめながら目をとじていると、いつのまにか朝になっていた。

いまでも眠れない夜にはこの父の言葉を思い出す。魔法にかかったかのようにいつのまにか眠りにつくことができるのだ。

幼稚園に通っていたときは、とあるテレビキャラクターが大好きでかぶりつくように見
ていた。赤やピンクや黄色、明るい色をたくさん使っているアニメに魅了された。もちろんグッズもたくさん買ってもらったはずである。

しかし、それとは対極ともいえるようなくまさんの毛布を、ずっと愛用していた。とにかくあつたかいのである。小学校高学年くらいになると、

「この毛布、クマがほしい。」と悪態をついていたが、それでも手放さなかった。

それもひとえにこのあつたかさにあった。

大学生になり、一人暮らしをすることになったときも、寒いときのためにくまさんの毛布を持って行った。

はじめての一人暮らし。それまでクラブや勉強に精を出していたため、家の手伝いなんてほとんどしなかった私。今まで私が学校でクラブや勉強を思いっきりできたのは家事を一生懸命してくれていた母や、家族のために働いてくれた父の支えがあったからだっただ、とこのときに本当に思い知った。一人暮らしをはじめて早々に母や父、家族のみんな

に会いたくなくなった。

今までは家に帰ったらとにかく誰かがいたが、一人暮らしの部屋、帰ったってだれもない。

そのさみしさを紛らわせてくれたのは、くまさんの毛布だった。ベッド用マットも、かげぶとんも新生活用に買い揃えたものだったが、くまさんの毛布があることで、実家のふとんで寝ているような感覚ですぐに眠りにおちることができた。

くまさんの毛布は、生地がしつかりしたものだからあたたかい。ずっとそう思っていた。だが、それだけではないということに気付いた。くまさんの毛布と一緒に父母の心のあたたかさを一緒に思い出すから、あたたかく感じるんだ、ということに。

私は今年結婚した。くまさんの毛布は社会人になつてからもたまに使ったりしていたが、結婚すると決まっすぎて、不思議なことに毛布の縁がほどけて使えなくなってしまった。

結婚したのは、柔道をやっていたことのある、とても大柄な人である。友人に彼の写真を見せたところ、

「くまさん、って感じの人だね。」

と言われて、思わず笑ってしまった。

くまさんの毛布はもう使えなくなってしまったけれど、これからは、二代目「くまさん」と家庭をあったかいものにしていきたい。